

2005年6月6日

長野県知事
田中 康夫 殿

北安曇郡白馬村大字北城4895番地
元白馬高校PTA会長
白馬村民フォーラム代表
渡辺俊夫
連絡先:0261-72-5238

白馬高校—“普通科”からの脱却への私案

<はじめに>

本私案はズバリ白馬高校生き残りの極めて前向きなプランである。それは白馬高校消滅が白馬村の衰退を象徴する出来事と認識することに端を発している。

1、長野県教育委員会における現状と認識

平成14年5月、同教育委員会は定例委員会において、平成16年度より県立高校普通科の12通学区制から4通学区制に移行することを正式に決めた。「生徒や保護者の多様な価値観による学校選択の自由と機会の均等の拡充を図る」ことを県教委は4通学区制への理由として挙げている。また本通学区の見直しに伴い、都市部の特定高校に志願が集中することを避ける上でも県教委は、

- ・ 特色ある高校づくりへの改革
- ・ 地域との連携を重視した“開かれた学校づくり”

これらを、大きな眼目にしている。更に通学区の拡充を巡って“有名大学への進学という『学力』だけの価値基準のままでは一部の高校の競争が激しくなるだけ”との指摘に対し、県教委は、次のような方向を示唆している。

- ・ 文学、科学、スポーツなど、生徒が学びたい分野や多様な価値観の受け皿となれる高校を増やすなどしなければ、選択肢を増やすことに繋がらない。

以上、平成14年5月14日付『信濃毎日新聞』から引用。

2 , 4 通学区の選択の自由の喜びと悩み

30年ぶりに普通科の12通学区が4通学区に拡大されて行われた同年3月10日の県内公立高校一般入試。学校選択の幅が広がったことを歓迎する受験生がいた一方、旧通学区外からの流入もあって受験校の倍率が上がり、困惑する中で入試に臨んだ生徒もいた。県教育委が目指した「学校選択の自由」をどう受け止めたのか。

県内中学生、受験を終えて

「交通の便が悪く、初めから遠くはあまり考えなかった。ただ、いろいろな地域から生徒が集まれば高校が面白くなるんじゃないかな。もっと自由な校風が売りとか、選択肢を増やして欲しい。」(松川—駒ヶ根市の女子)

「自己PRが苦手なので後期のみで勝負した。他の地域からも集まるから厳しいかな、と思ったけど、蓋を開ければそれほど高倍率でもなかった。結局、本番でいい点が取れるかどうか。」(松本美須ヶ丘—松本市の男子)

「志願状況の発表から1週間はとにかく不安だった。最初から志願校を地元決めていた自分にとって学区が広がったのはぶっちゃけ迷惑。狭い学区で競争率が低い方がいい。」(上田東—小県郡の男子)

「自由に選べるのでこのまま続けてもらった方がいいと思う。ただ、自己推薦は、自分より優れていると思うのに受からなかった人も多かったので納得できない。」(伊那北—伊那市の男子)

「体験入学で自分に合っていると感じたから受けた。通いやすい諏訪地方以外の高校は考えず、周りの友達も志望校は地元が多かった。あまり通学区拡大の影響は気にならなかった。」(下諏訪向陽—諏訪市の女子)

「選択の幅は特に広がっていない。前期は志望校が実施しなかったので受けなかった。市内の別の高校と迷っていたが、そちらが高倍率だったので、こっちを受けることにした。少し気が楽でした。」(野沢北—望月町の女子)

「中野市から受けるのに制限があった昨年だったら、須坂高校を受けていたかもしれないが、自分の意志で学校を選べたと思う。(中野—中野市の男子)

以上、平成16年3月11日付け『信濃毎日新聞』から引用。

3 , 白馬高校の定員割れについて

新しい通学区制度が導入されても肝心の募集人員がしっかり確保されなければ適正な学校運営は望めない。実は現状の白馬高校の前にこの問題が大きく立ちはだかっている。平成16年白馬高校への志願者は、募集定員40名に対し志願者数29名(男子20名、女子9名)倍率は0.73(平成15年は0.77)、つまり定員を割っている。そして平成17年の定員割れは更に落ち込む。定員40名に対し志願者数24名(男子15名、女子9名、倍率0.6。平成17年の分は、同年3月4日県教委発表)という惨状である。もし、この数字がそのまま推移すれば、極近い将来、白馬高校の廃校はきわめて濃厚である。ところで言うまでもなく白馬高校は“県立”であるが、白馬村の清新イメージの象徴として、その存在は決して小さなものでない。OBの多くが現在も村内に暮らしている。大袈裟に言えば白馬高校廃校は白馬村衰退の象徴と言えよう。そうした事態を回避し、白馬村と共に白馬高校を前進させるためには県教委の大方針に沿って白馬高校の大改革が急務である。

4、県教委の高校14校削減案

そして平成17年5月13日県教委は、魅力ある高校づくりを力説しつつ、名指しこそしなかったものの今年度内に14校を削減することを内示した、その目安は次のとおりである。

- ・ 第1通学区(北信) 27 21(—6)
- ・ 第2通学区(東信) 17 15(—2)
- ・ 第3通学区(南信) 25 22(—3)
- ・ 第4通学区(中信) 20 17(—3)

白馬高校は、まさに風前の灯火の状態を迎えたのである。

5 , 白馬校らしい特色とは？

ここで冒頭に記した県教委の通学区見直しに伴う改革の指針を思い起こしていただきたい。

- ・ 特色ある高校づくりへの改革
- ・ 地域との連携を重視した“開かれた高校づくり”である。

そこで白馬高校の改革に当たり従前通り「白馬高校」の枠に留まり新設学科などを設けるのか？ それとも「普通高校」から根元的に決別し、全くの新生白馬高校として出直しを図るのか？ 当然ながら後者の路線を選択したい。言うまでもなく新生白馬高校は地域色が濃厚でしかも時代をリードすべく先進性を確保・実践しなければならない。更に新生白馬高校は、受験生の将来にとって夢のある選択と受け止められる学業の場であることは言うに及ばず、生徒対象を県内はおろか全国的な視野、はたまた近隣アジア諸国を初め海外からも留学生として受け入れる広範な門戸を持ちたい。そんな個性的且つ国際的な白馬高校の誕生こそ、白馬村にとって明るい未来を象徴する改革と提起したい。

さっそく新生白馬高校を展望する。

スキースポーツが、年間営業稼働日数100日が精一杯になってしまった現在、白馬村の将来は通年型の高原リゾートを目指すことで経済の活性化を見据え輝かしい観光立村白馬村の指針とするグランドデザインを構築すべきである。そうした指針のもと、新生白馬高校を先ず「普通高校」から「専門高校」へと大きくシフトする。その「専門高校」の主たる学科は次の4学科としたい。

- ・ ウィンタースポーツ学科
- ・ リゾートビジネス学科
- ・ 山岳環境学科
- ・ 農林環境学科

以上、4学科の新設に当たり、その卒業生の将来像として、願わくばなるべく地元、地方、及び地域での人生設計が叶うような人間形成を重視する教育方針を基本としたい。無闇に都会を目指す若者ではなく、自分の生まれた故郷で就業し、家族と一緒に暮らす選択に希望の持てるカリキュラムを特に重視したい。

そして将来新生白馬高校の卒業生は、明日の白馬村を背負って立つ人材として送り出してこそ新生白馬高校の大いなる改革の意味がある。

(1) ウィンタースポーツ学科

優れた自然環境及び施設環境を十二分に活かして、冬季オリンピック代表選手クラスの最高レベルの選手育成は言うまでもない。しかし、同時にスポーツを学問の一つとして捕らえ理論を蓄積していく場も必要である。白馬村の名産はウィンタースポーツである。養成種目の主軸を当然雪上スポーツ競技（アルペン、ノルディック、フリースタイル、スノーボードなど）とする。そして、選手養成と同時にウィンタースポーツの指導者及び理論者として将来を切り開かれる授業内容に力点を置きたい。また、新たなスノースポーツの開発など未来志向のカリキュラムの幅を広げたい。尚、地域スポーツ団体との連携を標榜する上で、白馬村スキークラブ、(財)長野県スキー連盟などとの協力体制を構築したい。

(2) リゾートビジネス学科

学問的に未だ体系づけられていないこの分野に於ける先駆的学科である。白馬村に限らず四季折々、恵まれた自然の変化を持つリゾート地であれば、その観光的資産を通年に亘りお客様から親しまれるリゾート像とは何か？そしてリゾート地に於ける経済の仕組みをどう構築したらよいのか？その辺りを学問的・実践的に学ぶ。いわゆる“観光科”とは一線を画す学科にしたい。

(3) 山岳環境学科

白馬村は‘98年長野冬季オリンピック滑降競技において自然保護の観点で苦い経験を味わっている。神様からいただいたハード：北アルプスは未来永劫白馬村の宝である。しかもその広大な山野の自然を守ることは子孫への義務と考えたい。その一方でアルピニストやトレッカーを気持ちよくお迎えすることも北アルプスの麓で暮らす住民の宿命である。アルピニストやトレッカーに愛され、それでいて大いなる自然環境を守る、ということは一体どういう施策を実践することなのか？ハード面、ソフト面も含め山岳環境の建設的な保全に真っ正面から取り組みたい。

(4) 農林環境学科

業として成り立っていく農業、林業とはいかなるものか。将来的に「環境」保全推進とどう折り合っていくかが問われている。また、リゾート地としての農業が供給側として一般農業とはひと味もふた味も異なる特色を持って然るべき。米生産農業に大きな変革を求められないが、リゾート地の農業分野として積極的に需要側と連携を以て、地域の特色ある食料生産業として変革が求められている。一方、疲弊した林業は、環境や観光の両面からの新たな視点に立つての再生が求められている。そして、これらの生業が再生されることにより里山が新たな資源となり地域に新しい風を吹き込むことに繋がる。また、目下注目されている“グリーンツーリズム”についても切り込みたい。本学科の究極的な狙いは、リゾート地に於ける新たな農林業像を模索することである。そして、その根幹に「環境」重視の姿勢を貫いていきたい。尚、県教委の方針に沿って“地域との連携”を受けて、同学科はJ A大北との密なる連携を図っていきたい。

6, 学校の運営にあたって

- (1) 住民が中心となって構成する評議委員会を設け、企画、営業、運営を総務する。
- (2) 海外提携都市との積極的な人的交流を行うと共に、外国語による授業を行うなどして、世界で活躍できる人材の育成を図る。
- (3) 本校の教師、講師は、なるべく地元、地域の有能な人材を集めることにより地域の活性化を図る。
- (4) 各学科定員は30～40名とし、その募集枠として3分の一は白馬村、小谷村を始めとする近隣市町村の子弟として、あとの3分の一は長野県在住子弟とする。そして残りの3分の一は県外及び海外組とする。
- (5) 白馬村、小谷村の生徒は自宅通学とするが、それ以外の生徒は全寮制とする。寮は村内及び近隣市町村の遊休宿泊施設を活用する。
- (6) 新生白馬高校は従前通り“県立”とするが、県の「特区」制度を活用して事実上“白馬村立”を標榜する。そして、その引き受け元は「白馬村教育委員会」とする。つまり「長野県教育委員会」から新

生白馬高校の運営を「白馬村教育委員会」に委託する試みである。

< 付記 1 > 県教委の打ち出した 14 校削減という事実を直視し、新生白馬高校への転換は一刻を争う大命題と認識したい。

< 付記 2 > この私案を作るにあたって、多くの有識者、有志らからいただいた提案、助言、意見等を参考にさせていただきました。

< 付記 3 > 一昨年より 2 ヶ月に一度開催している「白馬村民フォーラム」の第 1 回テーマとして取り上げましたので、討議内容および提言についてはホームページ (<http://www.tagayasu.com/hakuba-f/>) を参照してください。

新生白馬高校指導陣候補者（案）

校長

長谷川メリー（白馬村：聖白馬教会牧師）

校長補佐及び相談役

長谷川恒信（白馬村：白馬シニアキャンプ代表、白馬マイスター）

ウィンタースポーツ学科

丸山仁也（白馬村：国際スキー連盟TD、（財）長野県スキー連盟前副会長、元全日本アルペン三冠王）

山田誠司（小谷村：山田旅館）

猪谷千春（東京都：国際オリンピック委員会）

リゾートビジネス学科

荒木貞光（白馬村：株式会社白馬フォーティセブン代表取締役）

星野佳路（軽井沢町：（株）星野リゾート 代表取締役社長）

山岳環境学科

北原正宣（白馬村：山岳環境研究所所長）

エンライト・デービット（白馬村：エヴァグリーン・アウトドア・センター）

茅野実（長野市：長野県環境保全協会長）

今井通子（東京都：医師、登山家）

農林環境学科

郷津利明（白馬村：農業）

丸山定利（白馬村：びおとおぶ代表）

島崎洋路（伊那市：岐阜県立森林文化アカデミー教授）

以上敬称略

上記候補についてはあくまでも案であり、全ての候補者ご本人から了承を取り付けた訳ではないことを付記します